
研究ノート

民國 100 年北台媽祖文化節について

高橋 明 郎

民國 100 年 (2011) 年 11 月台湾滞在中に「北台媽祖文化節」を参観する機会を得た。民國 100 年の文化節は、従来のものより参加単位が北部圏外への拡大する一方、伝統的な行事の変質も表しているように見える。今回はその視点から行事を追ってみた。

なお、本稿で使用する写真はすべて筆者によるものである。

1 北台媽祖文化節

1.1 簡 史

行事のたびに新聞報道も勿論為されているが、台北市政府民政局の会見でもこの行事については毎年数回触れられている。そこで最初に関連する記者発表を拾い、簡単にこの行事の歴史をたどることとする。⁽¹⁾

そもそもこの行事は、民國 93 年 (2004) 年以降台北媽祖文化節として存在したものである。

これは台北市が行った台北築城 120 周年記念行事の一つであり、台湾省城隍廟が中心となり、基本的に台北市と周辺の北部諸地域の廟宇が参加した。

民國 95 年 (2006) 媽祖文化節は台北周辺の廟宇に八大県市の 15 宮が加えられ、全国規模になった。本来媽祖の祭りは旧暦 3 月 15 日に向けてのものが各地で盛んだが、

(1) 台北市政府の HP (<http://www.ca.taipei.gov.tw/>) 新聞稿欄の記者発表用文章の一覧から、該当行事関連のものを選択した。それらの内容からとりまとめたものである。

これ以降文化節は旧暦8月（新暦の9月）に行われるようになった。

この年は9月24日が開幕とされ、それに先立ち21日に台北市政府が千里眼、順風耳、北管演奏と侍女8名を加えて会見した。

24日、三芝・小基隆の福隆宮に安置される「金面媽祖」が關渡宮に出て、馬英九台北市長（以下いずれも当時、現総統）、周錫璋台北縣長、黃敏恭桃園縣副縣長、陳全桂新竹市長、彭光政新竹縣副縣長、林久翔苗栗縣副縣長、呂國華宜蘭縣長が参拝、同時に各県の物産を陳列、民衆に賞味させることで、通常の祭祀の犠牲を捧げる行事に代えた。

そして關渡宮から淡水河に36艘の遠境隊が進み大稻埕碼頭で上陸、台灣省城隍廟関係者が迎え、金面媽祖は二二八紀念公園に安置された。

周知のように、二二八紀年公園は、改名前は日治時代からの新公園（台北公園）で、現在の台湾博物館が本来の天后宮の場所であった。日治時代に媽祖廟は児玉源太郎・後藤新平記念資料館（のち建物は台湾省博物館、現台湾博物館になった）建築のため取り壊されたが、さすがに媽祖像は台湾人の信仰の中心だったので毀損することは憚られて台湾州庁に移され、その後三芝に運ばれたものである。この媽祖像は全身金箔貼りで「金面媽祖」と言われている。従ってこの年本当に久しぶりに旧地に戻ってきたことになる。

この文化節期間は、人々は公園で媽祖参拝が出来、毎日祭祀と芸陣が行われた。また、この年主人役の關渡宮が10月2日に保儀尊王（尅公）に虫害防止などの祈願を行い、茶所である文山区の猫空を巡視した。

民國96年（2007）は台北の天后宮（かつての艋舺新興宮）が主人役で9月16日から行われた。また「媽祖宗教信仰沿革暨祭拜禮俗展」が二二八紀年公園で行われた。

民國97年（2008）は最後の台湾巡撫である劉銘傳が光緒14年（1888）台北の天后宮建設の勅令を請願してから120周年に当たっていた。この年の主人役は南港の富南宮。9月6日、初の試みとして、北部では珍しい芸閣彩車⁽²⁾で夜間巡行、最初に天后宮が置かれた二二八紀年公園で10日まで展示と祭祀が行われた。

(2) 福建から渡来したとされる形式で車上で南管をともなって歴史劇が演じられる。

民國 98 年 (2009) はそれまでで最多の 21 廟が参加、9 月 20 日に開始された。この年は前月に八八水害という大天災があり、このため義捐金活動も行われた。また伝統的刺繍展示も行われ、台湾大学医学部の会場では「人間。媽祖」というシンポジウムが行われた。

民國 99 年 (2010) は古亭の南福宮が主人役で、9 月 4 日から始まり、北部で途絶えていた「洗塵⁽³⁾」という儀式が復活した (台湾中部の新港奉天宮では続いていた)。また花卉博覧会にかけたイベントも企画された。

参加は従来¹⁾の廟宇に更に中部の古廟を加えた 27 廟であった。即ち台北天后宮の媽祖像を移管した三芝小基隆福成宮 (金面媽祖)、湄洲媽祖の首廟である關渡宮 (二媽祖)、台北天后宮 (三媽祖)、南港富南宮 (南港媽祖)、南方澳南天宮 (金媽祖)、基隆慶安宮 (基隆媽祖)、後龍慈雲宮 (後龍媽祖)、桃園慈護宮 (桃園媽祖)、竹北天后宮 (竹北媽祖)、新竹香山天后宮 (出巡媽祖)、三峽興隆宮 (三峽媽祖)、板橋慈惠宮 (板橋媽祖)、貢寮德心宮 (湄洲媽)、十分寮成安宮 (三媽祖)、北海聖雲宮 (三媽祖)、士林慈誠宮 (六媽祖)、萬里漁澳順天宮 (湄洲媽)、竹南后厝龍鳳宮 (三媽祖副駕)、新港奉天宮 (開台媽祖) 麥寮拱範宮等媽祖廟 (開山六媽)、北港媽祖、鹿港媽祖、彰化媽祖、鹿耳門媽祖、朴子媽祖等の媽祖廟と臺灣省城隍廟である。

1.2 民國 100 年北台媽祖文化節

民國 100 年 (2011) の大きな変化は、従来旧暦 8 月に行われていた時期を新暦 11 月に移したことである。「建國百年北臺灣媽祖文化節」と銘打たれて、今回は台北市に加え、新竹市と新竹縣竹北市の、今年建廟 50 年の天后宮が主催者に連なった。また今後の行事の責任宮も輪番体制になった。主催が台北地区以外に充てられるのは最初のことである。

台北縣城隍廟が新港の奉天宮を迎え、9 時 30 分に隆重宮から北門から入場、かつての官道である延平南路を進む。

今回の企画は専門家の意見を参考に古式通りの行列を復元しようというものであ

(3) これは福建からはるばる渡った媽祖の長旅を労うために香湯で身体を拭く儀式である。

た。頭旗、頭燈、宋江陣、十二婆姐、跳鼓陣等学生の藝陣、哨角、官方祀典古禮、變駕儀仗隊、獻供舞蹈、神轎などが予定された。

期間中の祭祀は嘉義縣新港の奉天宮が担当した。この奉天宮と高雄の順賢宮が初参加となった。

2 11月5日

当日は台湾とはいえ11月の北部としては非常な晴天で、9時すぎには30度近くに気温が上昇した。定刻前には各芸陣が北門周辺の日陰に終結し始めた。

台北城に入場するところから、この日の行事が始まるため、各廟は、旧鉄道省方向から北門を抜けて延平南路に進む。着飾った中国風衣装の女子の行列は中華路方向から北門を通らずに延平南路口で花を撒いたりして歓迎する。路肩では哨角隊が歓迎の吹奏をした。



延平南路口で吹奏する哨角隊（三重済陽會）

その中を、各廟宇が進むが、まず風帆旗に先導され、やがて涼傘も通過し、神轎が至る。城隍廟は執事隊が執事牌を連ねる。竹北の天鳳宮の後には、宋江陣のいでたちの行列が続く。



新港奉天宮の涼傘

風帆旗先導の隊列を少女たちが
花を撒いて歓迎する

竹北天后宮の神轎



同執事隊



三峽興隆宮の執事牌

北門前に各神体が並んだ後、再び風帆旗を先導に廟宇ごとに延平南路を進んでいく。

この延平南路は北門で総統府裏に直進する博愛路と分岐し、中山堂の裏手に向かって中華路にはほぼ平行する道路である。現在の中華路はもともと城壁であって延平南路が旧道に当たる。博愛路よりは道幅がなく、両側に商店が連なる。主催者側は前列に折りたたみのパイプ椅子、亭仔脚には簡単な腰掛けを並べて観客の用に供した。

しかし、筆者の見たところでは、北門寄りの区画は比較の人がいたものの、南に進むほど観衆はまばらになり、最前列に欧米人を含む観光客が混じるものの、亭仔脚の下に腰を下ろす人はほとんど見られなかった。

この区間には、北門から入った廟宇の隊列以外に、所謂「藝陣」を行う隊列も加わった。北管を演奏する楽隊や、太子爺のグループ、七爺・八爺、千里眼・順風耳の両將軍（七爺とこの二名は勿論北門を潜ること自体背丈からして不可能だが）、幾つかの舞獅団はこの区間から加わったものである。

ご神体は伝統的な斜行の歩みだが、それ以外の表演をしていたのは一部で、半数は

衣装を持つだけ、道具を持つだけで舞わず、ただ進むばかりで、廟前で表演するのが本義とはいえ、観光イベントとしては、ここだけ見ても仕方がない。



延平南路を行く宋江陣隊



臺灣省城隍廟の八爺と七爺（延平南路）



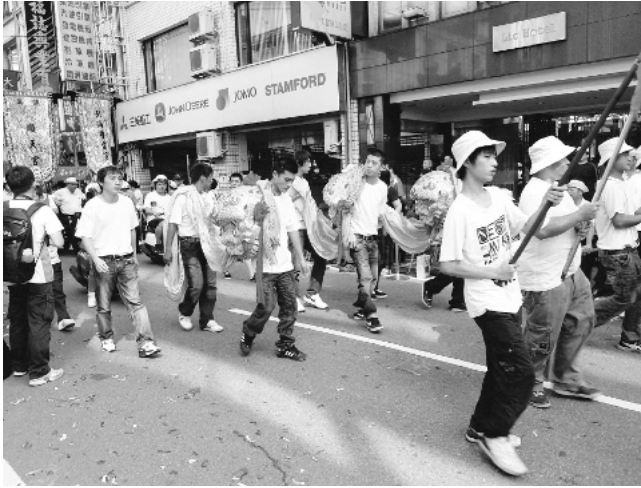
龍鳳宮，慈護宮，天后宮が
風帆旗を先導に進む



三芝新莊村新樂軒の北管



旧中国の婦女子の行列



三芝の北海聖雲宮金獅団。衣装は身につけずに担いだまま。

一行は中山堂の手前で武昌街に折れて、城隍廟前へ向かう。そして二二八紀年公園で次の行事が開始される。



關渡宮の千里眼將軍と順風耳將軍（武昌街）

3 表 演

さて、本来の台北の天后宮があった二二八紀年公園では、国立台湾博物館玄関前に集結した媽祖の神体が金面媽祖を中心に配置され、これら媽祖神の前で藝陣表演が行われた。

祭祀の時の布袋戲演台と同様、表演はここのご神体に向かって行われる。ご神体に向かって右手に若干のパイプ椅子が並べられたが、当然この位置では表演は横から見る形になり、結局観衆はご神体周辺に集中した。比較的スペースのある館前路に面した平面は、日蔭が無いこともあって演者の待機場としてしか機能しない。

伝統的な表演の中では、中国文化大学の学生たちが行った宋江陣が、その人数の多さと派手な立ち回りで拍手が多かった。



博物館前に配置された媽祖像たち



中国文化大学の学生たちによる宋江陣

しかし、より拍手を集めたのは、たとえば功夫服に近い黒ずくめで現代的な音楽で踊られたものである。ステップ、ジャンプなど、これはほとんどが現代ダンスの技法だった。ただ、最後にリーダーが小さな龍を被ったので、龍頭舞の一種として創作されたものと分かった。



現代風のダンスだが、最後にリーダーが龍の頭を持つ

車鼓陣も伝統的なものだが、今回は旦・丑のいつものやや下品な演技の後ろに、若い女性たちがAKB 48風の衣装で現れ、車鼓陣の旦・丑とともに踊り、やがて旦・丑がはけるとAKB風の女性たちだけで全く現代のダンスに移ってゆき、これも歓声があった。

ただし、AKB 風の女性たちの持っているのは「素蘭陣」で担がれるものと酷似している。



車鼓陣はまず旦・丑によって滑稽な伝統的動きで踊られた



旦・丑の後方に AKB 48 風の衣装の女性たちが入ってくる



両者が同時に別種の踊りを見せる

太子爺は、この日新港奉天宮の「電音太子團」ら数グループが来ており、その名前の通り電子楽器演奏の音源に乗って、相当早いステップを見せていた。



電音太子團の表演

今回龍陣は見られなかったが、弄獅（獅陣）は複数行われた。武功館などの団体によるもので、この団体により太鼓陣も披露された。



太鼓陣



太鼓陣の廻し打ちも人気があった



獅子軍の弄獅

最も伝統的だったのは千里眼、順風耳の二将軍で、音楽も動きも新奇さを避けていた。



門前で待機する千里眼将軍と順風耳将軍

一方金獅団は、獅子以外は平服だが、それだけに身軽な動きと、最後の竿登りで見せ場を作った。



金獅団の表演



最後は竿頭に乗る一柱擎天が見せ場である。



終演後記念写真に収まる太子爺

4 宗教行事か観光行事か

行事を企画してきた台北市政府は当初から一貫して媽祖文化節について、大きく二つの役割を意識してきた。宗教的な役割と、それにまつわる芸能の継承・紹介である。

第一の宗教的な役割から見ると、そもそもの中核は、金面媽祖の里帰りである。日本統治時代旧台北城内から逐われた媽祖が、もとの天后宮の地に戻ることは、それ自体が本来大きな宗教的意義を有する。

最初に、これを機会に台北市近在の廟宇の媽祖像を集めようというのも、媽祖の誕生日に合わせ各地の媽祖像が新港などの本廟に参集する従来の行事と同じような位置づけで見ることが出来る。

台北市政府としては、この文化節を機に市民が伝統的な宗教行事に触れる機会を増加させるという意図があり、その意味では、北部一帯に参加廟宇が拡大して既に5年経過し、今回さらに嘉義縣の廟も加わって、台北出身以外の市民が多く、またフィリピンなど東南アジア出身の居住者がかなり増えているこの地域の行事として一定の評価はできるであろう。しかし、その一方で、日本統治時代に逐われた媽祖像の里帰りという本来の意義は相対的に薄れていて、それは今回の行事の一部が初めて新竹縣に出て開催されたことにも現れている。

今なお「北台」の名前を冠しているが、参加地域の拡大によって、この意味するところが従来の「台湾北部の媽祖廟宇が参加する文化行事」から「台湾北部で行われる全国媽祖廟の文化行事」に変化してしまっている。

第二の芸能的側面、こちらが次第に強化されて、行事自体がもはや技芸文化行事そのものになりつつあると言って良いのではないか。実際に二十数廟が参加して次々行列すると、相当の時間を要するようになって、藝陣の要素は、人を集め、足止めるために欠かせない。

11月という時期に何日もの期間わざわざ台北で一般の人が自分の地元の楽隊や藝陣に参加するのは容易ではない。更に地元でも、こうした伝統的藝陣を継承するのは難しくなりつつあり、学校で組織的に学習させ継承を図らねばならなくなったり、対照的にプロの藝陣が存在感を増してくるという状況になっている。

今回も宋江陣を披露したのは中国文化大学の学生たちであり、風帆旗を持ち先導したのも、それぞれの廟宇の者ではなく学生だった。また電音太子団や獅子軍などプロの集団が担った部分も大きい。

勿論これは今回に始まったことでない。そもそも第1回の時、淡水河に入る前に本来あるべき犠牲を捧げる儀式を省略して、廟宇のある各地の名品を並べ日本の「道の駅」的場面になってしまっていたらしいことから、台北市政府としては宗教云々以上に「町おこし」の如きことも当初から狙っていたことが分かる。台北市政府としても行事拡大に合わせて、媽祖像里帰り期間以外に、藝陣の継承や広報に関連する企画を加えるようになっていた。

9月に開催されていた時も、この文化節の翌月に「藝陣會師迎城隍」と称して市政府中庭に藝陣の衣装を展示したり、市民広場で台湾全土から幾つかの学校団体やプロ集団を招き実演させている。はるばる台東大学の宋江陣を招いたり、溝坪国民小学校が白鶴陣を行ったりした⁽⁴⁾。またプロ集団である明華園や台湾民俗舞蹈団も公演したことがある。

更に言葉を加えるなら、藝陣の内容も、継承の範囲を超えて変質している。2で触れたように今回筆者の見た千里眼・順風耳は音楽・演技も伝統的だったが、龍頭舞の踊りは現代的ダンスであり、車鼓陣の旦・丑は仕草こそ伝統的だが、音楽は合わせて動いているAKB48風のものである。

これを藝陣の「今日化」とプラスに評価するかどうかは難しいところだ。今回の一連の行事を見ていて想起したのは、原住民文化園區のことである。例えば三地門。確かにそこを訪れれば、各民族の家屋、音楽、踊りに触れることが出来る。原住民の若者が各部族の服も着ている。しかし、例えば阿美族の踊りとして紹介されるものを踊っているのは必ずしも阿美族の若者ではない。つまり、そこで触れられるものは、「漢民族」と対比した「原住民」の文化一般で、演じる者の族群の区別は実際には相当曖昧になっている。

この媽祖文化節も、広く「媽祖文化」一般を紹介することで、逆に各地の藝陣の特

(4) 児童の白鶴陣は、この学校の団体が世界唯一だという。

色の認識や地元の媽祖への信仰心、藝陣の伝統的内容は今後さらに希薄になっていくと見られる。

今年度も文化節全体では三万余を動員できたと報道されているが、実際には一部のカメラマンたちの熱気と対照的に観覧席には空席が目立ち、博物館前でも表演プログラムのうち一つに、たまたま通りかかった台湾人が足を止めるといった姿が多かった。これには、千里眼にしても車鼓陣にしても、別にこの日でなくとも三月近くになれば各地で見ることはまだ難しくないという理由もあろう。この日に本当に興味を持って行事を観るのは筆者のような国外の人間であろうが、観覧のためには、余りにも施設が整っていないので、全部を見通すのはかなりつらい。また、日本人に比べると信仰心が厚い台湾の人々だが、道行く媽祖像を拝する姿は、意外なくらい少なかった。

このように、開始後まもなく10年がたとうとしているこの行事は、内容・方法とも修正が必要になっている。